

『静かなる病』

2007/02/27

seren arbazard

2006/12/19

アトラスで悪魔シェルテスを倒した私たちは神々の祝福を受け、無事地球へと帰ってきた。一緒に戦ったアルシェやハインさんとはアトラスで別れた。アトラスを救った褒美として、悪魔メルティアが 1 つだけ時間を操って願いを叶えてやると言い、アルシェは自分の母に会いに行ったからだ。

レインはというと、本当は亡くなったお父さんに会いたかったのだろうが、会うと帰りがたくなってしまうと思って止めたそうだ。もし過去に行ってお父さんを助ければ、私には会えなかったことになる。それが嫌なのだ。

お父さんが亡くなったのを彼女は決して肯定していない。ただ、起こってしまったことは受け入れるという姿勢なのだろう——と言ってしまえばきれいに聞こえるが、実際は親友と父のどちらかを選ばなければならない状況に身を置きたくなかったのだろう。

結局レインは私たちと地球に来た。この星で何かやり残したことがあるみたい。何だかは分からないけれど。

今、私は先生とレインと 3 人で自分の部屋にいる。お父さんとお母さんにはもう会って、ただいまの報告をした。娘の冒険活劇を 2 人とも飽きもせず聞いてくれた。お父さんはいつもどおり黙っているだけだったけど。

さて、そろそろレインともお別れなのかしら。そうになるとまた来年かあ、寂しいなあ。静を見ると、レインを見つめて何か言い出そうとしていた。同じことを考えてるのね、きっと。

静が口を開こうとしたとき、中空が光って、光の中からメルティアが現れた。いつものことだからもう慣れたわ。

メルティアが私に願い事を聞いてくる。私の願いは決まっている。それを告げるとメルティアは少し意外そうな顔をした。

私は静と 2 人でアトラスに行きたい。毎年のアトラス旅行を静と 2 人で。そして、レインとアルシェを囲んで 4 人でいつまでも楽しくしていきたい。織姫と彦星のような儂い時間しか共有できないけど、それでも 4 人で過ごしたい。

メルティアが以前約束してくれたのは私のアトラス行きであって、静は数に入っていない。だから私はそこに静を加えてもらった。それが私の願い。

「それでいいのか？自分の願いは？」

意外そうな静の声。私はにこりとして答えた。

「私の願いですよ。先生と一緒にアトラスに新婚旅行しに行くのが」

すると静は少し照れたように笑った。ああ、私の愛しい人。その笑顔のなんと美しい。

次は静が願いを言う番だ。だけど静は気まずそうに黙ってケータイを見ている。どうしたんだろう。思いつかないのかな。

「紫苑、俺には難しいから、訳を頼む。なあ、メルティア……だったら俺を 1 年前の今日に戻してくれないか。こっちの暦で。場所は俺の部屋。時刻は深夜 3 時ごろで頼む」

私は訳そうとして途中で言葉を止めた。

「ねえ、なんで今日なんですか？」

静は黙っている。

「去年の今日、何があったんですか」

「……訳してくれ」

黙って押し通そうとする静。私は直感した。

そうか、それで今朝起きたとき、先生は私の手を握って枕元でずっと私を見下ろしていたんだ。

そう……あれは、私が逃げないために。私という存在が夢のようにいなくなってしまうないように。先生はシェルテスとの決戦の朝、シェルテスなんか恐れていなかったのね。あなたは、また裏切られることを恐れていた……。

「……蛍さんが、出て行った日？」

確信を持ちながらもおずおずと聞く私に静は何も答えなかった。その瞬間、不安がこみ上げた。

「ダメ！」ガバッと抱きついた「訳しません。そんなの訳しませんから！」

「どうして？」

「先生……」 静の顔を見上げる「だってそしたら先生帰ってこないから」

「そんなことないよ。俺と蛍はいつ切れてもおかしくない状態だった。あまりに性格が合わなさすぎるんだ。実は俺は何度か離婚してくれと言っていたんだよ。役所に離婚届を取りにいこうとしたこともあった。だけどあいつが急にいなくなったのは誤算でね。それだけならいいんだが、その後一切連絡をよこさないとは思わなかった。今日でちょうど 1 年だ。仕事をして紫苑と会ってアトラスへ行って……激動の 1 年だったよ。でもな、未だに気持ちに整理がつかないんだ。弁護士を通して間接的に互いの真意も知らぬまま別れてしまい、子供とも会えずじまいだ。俺はね、過去に戻ったら蛍に別れ話をこちらから持ち掛けたいんだ、正式にね」

「……うそ」 消え入るような声。

「え、なに？」

「嘘です……それ、嘘です。先生、帰ってこない。帰ってこないわ」

「来るさ。今、新婚旅行の話をしたばっかだろ」

首を振る私。

「今のこの瞬間の先生の気持ちなら信じられる。でも、帰ってくるっていうのは嘘。向こうに行けば気持ちが変わるわ。いまは先生、蛍さんの裏切りに怒ってる。でも、発作的に出て行った蛍さんは先生のことが嫌いじゃなかった」

「嫌いじゃないのに出てくのかよ？ありえないだろ」

「蛍さんは通帳や印鑑なんかを持って出て行ったんですよね。女として思うんですけど、妊婦で荷物が持てなかったにしても鞆ひとつ程度の荷物は少なすぎです。一緒に結婚してたなら、最低限のものでももっと量が多くなる。計画的なら気付かれないように少しずつ実家に送るなり持っていきなりしていたはずだわ。蛍さんは他に何を持っていったんですか。先生との思い出の品は一切持っていかなかったんですか？」

静は一瞬驚いたような顔で止まった。そして少し苦しそうな顔をしたが、すぐにとりなした。私は目をそらさず静を見つめていた。

「持ってったよ。貧乏院生だったころに買ってやった安物の結婚指輪と、大学するとき……結婚しようって言って池のほとりで挿してやったべっこうの髪飾りを。一銭の価値もない……愛情だけの品物だった」

胸痛がした。この痛み、静も今感じたのだろうか。

「それを持ってった蛍さんは出て行ったときは貴方を心底嫌っていたとは思えません。お互いに憎悪が湧いてきたのは別居して呪縛が解けてからで、周りの人間にあれやこれやと言われて増幅していったんでしょう？先生も彼女も同じだわ。いまの先生は蛍さんが嫌い。いまの蛍さんも先生が嫌い。でもね……何度も夢で見たんじゃないですか。蛍さんとやり直す夢」

「そんなことないよ」

「ありますよ……寝言で呼んでたわ。横に寝ていた私がそれを聞いてどんな気持ちだったと思いますか？私を抱いたすぐ後で先生は奥さんの名前を……」

ついに私は泣き出してしまった。静は一瞬絶句した。

「まあ……確かにそんな身勝手な見たくもない悪夢は何度となく見た。寄りを戻したいという意味ではない。ただあまりにもあいつが当たり前の存在だったから、夢の中では相変わらず情報が更新されずにあいつと生活してただけなんだ。気持ちに整理がついてないからこういうことが起きるんだ。だから気持ちを整理しにいくんだよ」

「じゃあ先生が蛍さんのところに行くとします」

「紫苑」私の言葉を遮る静「そのもしもの話を実証しにいくんだよ。今から紫苑が言おうとしている結果に本当になるかを見に行くんだ。でも大丈夫、俺は紫苑を選ぶ。ここまで言っても俺のことが信じられないか？自分が俺に愛されていることを信じてくれないのか？俺たちは死線を潜り抜けたばかりじゃないか。婚約だってさっきしたばかりだ。それなのに信じてくれないのか？」

「それは……」私は言葉につまった。そう言われてしまえば返す言葉がない。静を……信

じてみよう。うん、そう……信じたい。

「信じて……いいですか？」

静はゆっくり頷いた。私はメルティアにゆっくり向くと、涙を拭いながら静の願いを訳した。

2005/12/19

光の中を歩いて目を開けたら、そこは闇だった。だが、それが単なる闇でないことはすぐに分かった。たとえ目が見えなかりょうが、匂いで分かる。ここは、俺の部屋だ。不思議なもので、俺はまず始めに嗅覚で1年の時が戻ったことを知覚した。

一瞬、胸が詰まるかと思った。それは、俺の部屋に混じった蛍の匂いだった。蛍がいた俺の部屋の匂い。この1年すっかり失われた、紫苑とは異なる清潔な和風の香り。もはや懐かしいとさえ感じるこの匂い。また味わえるとは思えなかった。

いる。

そう、いるんだ、この闇の中に、蛍が。

俺は手を伸ばした。すると、すぐ側に求めていたものがあつた。この1年、逃げられてからというもの、一切触れることさえ適わなかった肢体がそこにあつた。

目が慣れてきた。薄闇の中、見えたのはすっかり顔を忘れかけてしまった蛍だった。生活臭というのだろうか、蛍はマスクを着けて苦しそうな寝顔で寝ていた。そうだ、思い出した。確かこのころ蛍はつわりの上、風邪を引き気味だったんだ。つい何日前まで葛根湯を医者処方されていたっけ。

何だか感慨深くて、ふ……っと鼻息が漏れた。ああ、そうだそうだ、こいつが蛍だ。こんな顔をしていた。そう、こんな身体をしていた。こんな髪をしていた。

「……ほたる」

俺は声を出したが、名前を呼ぶのにずいぶん躊躇したせいで、掠れてしまった。

「ほたる」

もう一度呼んでみる。今度は声が出た。だが、蛍は目を開けない。俺は緊張していた。ゆっくりと手を伸ばす。もはや俺の中では別れた女なのだ。このときの蛍がまだ離婚していないとはいえ、離婚した女として見てしまう。だから触るのもためらわれたし、ひどく緊張した。

ゆっくり遠慮がちに額に手を当てた。それでも蛍は起きない。一緒に生活しているところまで無防備になるものなのだ。と久々に実感した。紫苑なら、もう起きているだろう。

もつとも、蛍も出会ったころはそうだったな。初めて蛍とホテルに入ったとき、横で男が寝ているという異常事態に直面した蛍はたった1時間で起きてしまった。あのころが懐かしい。

「蛍、なあ、蛍」

何度か呼んで軽く揺さぶると、「うん」と声を上げて蛍は目を醒ました。

「……なあに、どうしたのお？」

疲れ切ったような蛍の声。

「大丈夫か？ずいぶん辛そうな顔をしてたから心配で」

「うん……大丈夫よ」

「あのとき……じゃなくて、さっきさ、言ったよな、寝る前に。あんまり疲れてれば一瞬で寝れるよって」

「……」

何も答えない蛍。ん？と思った。俺、そう言わなかったっけ？いや、違う。確かに言った。単にこれが蛍のコミュニケーション能力なのだ。相槌を打つべきところで打たない。1年ぶりだというのに一瞬にしてイライラが呼び起こされる。ちゃんと聞いているのかお前と心の中でつぶやく。

「あのさ、疲れてるところ悪いんだけど、少し話をしたいんだ」

「……うん」

「俺らさ、さっき明日の予定を話したよな。今日は日曜で、明日は月曜。いや、もう明日になったか。とにかく、明日の予定を話した。昼にけんかして、夕方蛍の方から「みゅーして」って言ってきて、夕飯食べて、ふつうに寝た。そして今だ」

「……んんー」

眠そうな声。深刻な声で話しかけているのに、まるで面倒くさいような反応だな。

「蛍」いつもならもう怒っているところだが、疲れて眠いのもあるだろうし、何より久々に会っているのでまだ我慢できる「悪いけど、本当に大事な話なんだ。明日の仕事とか考えないで、きちんと起きて話を聞いてほしい」

すると流石の蛍も「まってえ。今、電気つけるから」と言っただけでそのそ起きだした。電気をつけてメガネをかける。とりあえずこちらを見る意思はあるようだな。

「蛍さ、いまから相変わらずのトンデモ質問をするけど、素直に答えてね」

「うん」

「まず、そのお腹の子。俺の子で間違いないね？」

「うん、そうだよ、間違いないよ」

「で……んーと」俺も俺で何を言おうか順序立てているわけではない。だが蛍はぼーっとしたまま待機している。これが紫苑ならさっそく首を傾げて何か質問をしているところだ。

「明日の予定話したよね」

「……」

何も言わない蛍。その沈黙に意味はない。ただ、沈黙がデフォルトなのだ。俺は冷ややかに言う。

「あのときから既に出て行くつもりだったの？」

「……え……？」

「あのときからもう俺を騙していたの？」

「え、なに……どういうこと？」

「どうして出てったときに床にクスコがほっぼりだしてあったの？流そうとしたわけか？
なにに出産したのはなぜだ？お母さんに言われて気が変わったのか？どうして出て行く前
に俺を刺さなかった？俺が憎いんじゃないのか？」

「え……静……？」

困惑した顔の蛍。俺はまったく冗談ではない真剣な顔で問い詰めている。もし蛍が先ほ
ど既にタヌキ寝入りをしていたのなら、俺の言葉の一部は深く突き刺さっていることだろ
う。

「いい……答えなくて。その代わりに、俺から言いたいことがあるんだ」

じっと見ている蛍。別に頷くわけでもなく。相槌は乏しい。非常にストレスのたまる会
話だ。われながら、よくこんなのに耐えていたものだ。

「……ぎゅっとしても……いいか？」

「え……う、うん」

俺はゆっくり寄り添ってぎゅっとして蛍を抱きしめた。ちょうど1年ぶりの懐かしい感触だ
った。暖かい。慣れた感触。若いころにときめいた大学時代の甘い思い出が紡ぐこの感触、
忘れない。何人女を抱いたところで忘れられないこの感触。蛍だ……。唯一の魅力は、大
学時代に真剣な恋愛を経験した相手だということだ。いかにレスポンスが悪かろうと、や
はり俺はこの子が好きだったのだ。

「あのな、蛍……仕事、明日から冬期講習だよな。大変になるよな。月曜だし、つわりだ
し、俺とはけんかばかりだし。あと、俺の稼ぎ少ないよな。嫌だろ？」

「そんなことないよ……」

俺は鼻でゆっくり笑った。そんなことない、ね。

「じゃあきつと、「今、俺がたまたま起きてこの話をしなかったら蛍はいなくなってしまう
ていたんじゃないか」という問いに対しても、同じことを言うんだらうね」

「……？」

「どう？答えて。俺を裏切るつもりだった？」

「……え、どういう意味？」

「いいや、もう。あのな、蛍、仕事について相談があるんだ。仕事さ、辞めてくれないか」

「え？」

「明日、昭和記念公園行こう。つらかったら近場でもいい。ゆっくり行こう。何なら帰
りは泊まってもいい。とにかく、ゆっくりしよう。冬の花を見て、帰りは暖かいところへ寄
ろう。そして今後の身の振り方を考えよう。俺はお前とこんな形で別れたくなかったんだ。
俺が今までお前にしてきたことは悪かった。そしてお前が俺にしてきたことも同様に悪か
った。でも安易に飛び出して事を荒立ててはいけない。子供のことがあるんだから」

「……」

蛍は何を考えているのか、何も答えない。

「別れるってどういうこと？それに、私が仕事辞めちゃったら、お金はどうするの？」

「俺さ、教師辞めるよ。収入が不安定だもんな。英語を活かした職ならいくらでもある。翻訳とか外資全般とか。とにかく教師以外の安定した仕事に就くよ。蛍はいままでよく俺のことを支えてくれた。ありがとう」

肩を抱いて蛍の目を見て言った。蛍は安心したような顔になって、にこりとした。ああ、こんな笑顔を見たのはいつぶりだろう。蛍って笑うんだったな……。

「今度は俺がお前と子供を支える番だ。俺の集中力は知ってるだろう？任せていいよ。蛍は仕事を辞めるのに異存はないね？見ていてこっちが辛いくらいだったし」

「うん、私は平気だけど、急に辞めるなんてできなくて明日から冬期講習だし、事務で正社員は私だけだし、ほら、私、主任だし」

「俺から連絡するよ。つわりがあまりにひどいのでということで」

大丈夫。だってお前はその後突然辞めますと電話 1 本で辞めてるんだから、それに比べればずっとマシだ。

「幸い、蛍が稼いだ分の貯金だけでも 100 万くらいはあるし、俺のもあるわけだから、しばらくは働かなくても平気だよ。俺が稼ぐから。本当は入試後まではいたいんだが、俺たちの人生の方が優先だ。すぐに就活を始めるよ。子供が産まれたときに無職なんてまっぴらだからね、すぐに見つけるさ。

あとな、お前、俺に怒られるのが嫌だったんだな。じゃあ俺はもう怒らないよ。それでいいか？」

「え……う、うん。でもそれじゃ静が潰れちゃわない？」

「そうだなあ、だったら蛍も蛍で怒らせない努力をしてくれると助かるな。けんかなんて不毛じゃん？」

「うんっ」

蛍はすっかり上機嫌で、にこにこしている。と思ったら「しずかあ〜」と言いながら猫みたいに抱きついてきた——かつて「いつも」だったように。

2006/6/27

蛍を引き止めてからというもの、それは忙しい日々だった。まず、蛍の会社に電話をして、退職する旨を話した。気が変わって実家に逃げ込まれないよう、実家とも密に連絡を取って、向こうの両親にも媚を売っておいた。

俺は俺として塾を辞め、仕事を探した。といっても探したのは1月に入ってからだ。不安定な蛍がいつ逃げ出すか分からない不安があったので、俺は毎日のように蛍をお姫様扱いしていた。蛍は俺の変わりようを訝ってはいたようだが、それでも優しくされることに不満などあるはずもなく、上機嫌だった。

セックスにも応じてやった。はじめは1年ぶりだったので緊張したが、すぐに感覚を取り戻した。抱き慣れた女というのは慣れた枕や布団と同じように心地よい。

1月に入ると安定期に差し掛かったため、つわりは治まっていった。1月の後半になると食欲が出てきて、日々の生活も楽になった。

ああ、あのとき冬でなく風邪もなくつわりもなく仕事もなく冬期講習もなく俺とのいさかきもなかったら、きっと俺たちは別れることなどなかっただろうになあ。どれか1つでも違っていれば……。

蛍がすっかり里帰りする気配をなくしたので、2月になると俺は本格的に仕事を探し出した。TOEICのおかげだろうか、持ち前の外面の良さのおかげだろうか、容易に翻訳の仕事を見つけることができた。しかもただの翻訳ではなく、よそとの折衝もする仕事だ。雇用形態は契約でもパートでもなく正社員だ。一応株式会社で、有限会社ではない。オフィスは家から遠くないところにある。手取りは塾より悪くなったが、ボーナスを入れればとんだ。蛍は収入が安定している方が嬉しいようで、金に関する文句は口にしなかった。不安も感じていないようだ。そりゃそうだ、この給料だって同級生よりは多い。

俺は3月には働きだしたが、専業主婦になった蛍は家で最小限の家事をやり、編み物なんぞをやっていた。手芸全般は得意なので、子供の物を編むだのと言って張り切っていた。

家に入ってから蛍の精神が安定し、俺をイラつかせることが少なくなった。心なしか笑うことが増え、レスポンスも前ほどひどくはなくなった。思うに蛍は身体が弱く、具合が悪いせいで、余計にレスポンスがなかったのではないか。俺としても蛍と接する時間が結果的に減った分、イライラする機会が少なくなった。

幸せかと聞いたら、幸せよと蛍は答えた。

5月には目に見えてお腹が大きくなり、6月に出産をした。入院をするかどうかよく分からなかったが、結局することにした。入院期間は短かった。肝心の出産だが、俺は仕事で立ち会えなかった。だが母子ともに健康で、蛍に至っては案じていたわりにはあっさりと産んでしまった。産んでからの入院も数日で、あっさりと退院してしまった。

産まれたのは男の子だった。蛍の親が名前を打診してきたが、俺は役所に行ってこう提出した。

6月27日。

俺は生まれて間もない赤ん坊を抱いて、頭を撫でた。

「ねえ、静。アルシェは？」

部屋に置かれたベビーベッドの横で蛍が声をかけてくる。

「寝付いたみたいだよ」

俺はゆっくりと、初めての息子を蛍に渡した。蛍はアルシェを起こさないよう、ゆっくり抱きかかえた。まだ首が座っていない。それどころか、かろうじて人間という感じだ。

アルシェという名前は蛍や家族にはわけの分からない突拍子もないものに映ったようだ。何が由来なのかと聞かれ、俺は説明に窮した。でも俺は男ならアルシェ、女ならリディアと決めていた。俺が黙っていると、蛍はそれ以上追求してこなかった。俺が不機嫌にならないよう、きれいな名前だから素敵ねと言ってきた。

アルシェをあやす蛍。俺は立ち上がってクローゼットに歩み寄る。そのままスーツに着替えた。

「……どうしたの？こんな時間に着替えて」

「うん」

「どこか行くの？」

「いや」

俺は部屋のドアを閉めた。そしてベッドに寝転んだ。わざわざスーツに着替えてベッドに寝転ぶ俺を不思議そうに見る蛍。

「なあ、蛍」といってベッドをポンポンと叩く。蛍はそそっと寄ってくる。

「ちょっと話をしたいんだ。中、おいで」

すると上機嫌な顔でベッドに潜り込んでくる蛍。

「なあ、いま幸せか？」

「うん、私、幸せよ。アルシェもできて、本当に幸せ」

「俺のことさ……愛してる？」

「もちろんだよ。愛してるよ。いつもそう思ってるもん」

「腹減ってても？」

「ふふ、うん。おなか空き空き、しずか好き好き」

「はは、なんだそりゃ」

俺は布団をかけた。

「あのさ……」2人で毛布に包まる。左腕を伸ばして腕枕をしてやる。ちょこんと首を乗せる蛍。

「去年の12月19日、覚えてる？」

「12月19日？……ううん、何かあったっけ……あったのよね、静がそう言うからには」
考え込む蛍。

「うん、この場合の蛍は思い出せないかもね」

「「この場合」って？」

「あのとき俺を裏切らなかった蛍……いや、違うな……あのとき俺に裏切りを阻止された蛍の場合っていう意味だよ」

「裏切るって……なんで私が静を？」

「あのさ、俺、この1年がどんなだったか話してなかったよね」

「??」

「お前に捨てられてからというものさ、色々あったわけだよ」

「ええ……？」

「まあ聞いてよ。とにかく、お前は俺を裏切った。あのときな。お前は俺が寝ている間に裏切って実家に帰ったんだ。塾も勝手に辞めて、俺の元を去った。そして親だけでなく、警察や裁判所や弁護士を使い、あの手この手で俺を弾劾した。俺は離婚には合意したが、子供をおろすのかどうか気になっていた。それを教えてくれと言ったのに、お前は一切教えてくれなかった。俺が何も分からずに喘いでいるのがさぞや楽しかったんだろうな。そうやって俺に復讐したんだよな。お前は「病なでしこ」だから。お前の病はそのコミュニケーションの取れない静かさにあるんだよ。だからずっと苛められてきたんだよ、子供のころ」

「え、ちょっと待って。ほんとに、何の話？」

「なあ、どんな気分だ？俺をあざ笑うのは。子供がどうなったのか請願しても教えてもらえず、お前は勝手に産むことを決め、産んだ。そして産むなら知らせてくれと言ったにもかかわらず、お前は何も知らせなかった。誰かを介すことさえしなかった。勝手に産み落とし、勝手に戸籍に入れ、勝手に戸籍から除籍した。

俺が子供の存在を知ったのは戸籍を取ってだよ。勝手に日本人らしい名前が割り当てられた俺の子供。俺がどんな気持ちだったと思う？戸籍を取って初めて知った子。

はっきり言うよ。俺はアルシェの出産には立ち会えなかったが、生まれたことを知っている俺は彼を愛することができる。でもな、生まれたのも知らなかったようなガキを愛することはできない」

「……」

「紙に冷ややかに書いてある息子の誕生日と名前。知りもしない命。事務的に伝える練馬区役所の紙切れ。ふざけてる。こんなの、ふざけてる。

だから俺は未来を変えた。お前に勝って報いを与える一心で。そして、想像もしなかったことだが、過去までこうして変えることができた。

あのな、俺はお前に捨てられた後、教師を続けてたんだよ。そしてそこで1人の少女と出会った。紫苑という生徒だ。お前と同じで友達のいない子でな。変わった子なんだ。異世界に行きたいと子供のころから願い続けて、本当にそれが叶ってしまったんだ。そしてそこで冒険をして帰ってきた。その後、塾で俺に出会って付き合った。付き合ったのは今日。そして来月、俺は異世界の少女レインと会うことになる」

「静……お話をしているの？」

「お話みたいな現実だよ。

俺はレインに会った。彼女は月の悪魔に追われていたんだ。俺と紫苑は彼女を助け、異世界で悪魔を倒した。その功績が認められて、過去を一度だけやり直す権利を与えられたんだ」

俺はじっと蛍を見た。

「お前は俺が死んでも構わないな」

「構うよ！何言ってるの！？」

「いや、今のお前じゃなくて。むしろ構わないどころか死ねと思っている。愛して精子を胎内に何億と受け入れ、子を宿した相手に対して、平気で手の平返して死ねと思える——そんな女なんだ、お前は」

「なによ、それ……」

「そんな裏切りを受けたら、俺はどうすると思う？当然お前に復讐を誓うよな。でも、できない。なぜか？法があるからだ。お前を潰せば俺の人生が台無しになる。紫苑に迷惑がかかる」

「ねえ、そのシオンっていうのは誰なの？架空の設定？何の話をしているの、いったい」

「お前が受けるべき報いというのは量が限られている。だが、実際はそうはいかない。なぜか分かるか？お前は何を呪うべきか分かるか？

それは法だよ。お前がなぜ必要以上の報いを受けるか。それは法のせいだ。フェミに媚を売ったこの国の腐れ法律は女に微笑む。平等とかほざくくせに、親権争いになると女親が幼児期は育てるとか言って女親に親権をあっさり渡す。仮に夫が主夫でもだ。ふざけてるよな。そのくせ見せもしないガキの養育費だけ男からふんだくりやがる。女ってのは良い商売だよ。

お前と離婚すればお前は親権を要求するに決まってる。かつてそうしたようにな。そして俺はまたアルシェと離れ離れだ。そんなの許さない。法だ、法律さえ正しく機能していれば、離婚で済ませてもよかったのに。

警察も裁判所も同じ。女が被害を受けたと言えそれが通る。痴漢冤罪もいいところだ。お前は法を逆手にとって俺を苦しめたな。あのクソ弁護士にしても同じだ。だから今度は俺の番だ。国家権力に敵うものはないなどとタカをくくっている法曹界の連中に、悪魔の力を思い知らせてやる。

蛍、俺はな、俺の敵を許さねえよ。俺のプライドを傷つけたやつは、どんな手を使ってでも復讐してやる。だが、俺はそう思いつつも今のところ何もしないでいる。結局お前なんかのために自分の人生棒に振りたくなかったからな。俺はお前のことなんか忘れてとつとほかの女と遊んでいたかったから。だからお前に復讐したくても、捕まるとバカバカしいから、復讐しないでおいた。ただそれだけの話だ。長短を天秤に乗せてるだけだよ」

俺は右手をぎゅっと握った。

「じゃあここで疑問なんだが、もし法の目をかいくぐる魔法があったら？」

俺はきっと、自分の気持ちに正直な行動に出るだろうね。裏切りには裏切り。それがお前の受ける報いだよ、蛍」

俺は蛍にゆっくり覆いかぶさった。

居心地悪そうに、気味悪そうに見ていた蛍の目が大きく見開いた。シーツの下に隠しておいた右手のナイフが蛍の臍を突き抜け子宮に深々と突き刺さったのを手に感じた。

蛍が声をあげる前に、俺は左手で口を押さえた。暴れだす蛍。手で必死に俺を振り払おうとするが、非力な蛍では俺をどけることはできない。俺は渾身の力でナイフを縦に動かした。2度と、ほかの男の子供も産めないように、蛍の子宮を引き裂いた。

悲鳴やら嗚咽やらをあげる蛍。だが口を押さえられて声にならない。俺は心臓が脈打つのを感じた。流石に緊張がひどい。

「どうして半年前に戻ったとき、すぐに復讐しなかったと思う、蛍？」

子供に罪はないからだ。言ったよな、産まれたことを知った子供なら、育てた子供なら、愛せると。あの場で母体を刺したらアルシェまで殺してしまう。そんなことはできない。あの子の誕生は少なくとも知っていたのだから。

俺も俺なりに子供を愛してる。

罪があるのはお前だ、蛍。俺にはお前を裏切った罪があった。お前にも同様だ。これで相殺。しかしお前は俺を捨てた後、俺をあざ笑った。子供の出産のことで苦悶し、悩み、苦しんだ俺を尻目に笑っていたんだろ、ふざけやがって。お前だけは許せない。死ぬ」

蛍は目を見開いて、涙を流して、ビクビクと痙攣する。何が自分に起こっているのか、まったく分からないという表情の蛍。これだ、この顔だ。

「何が何だか分からないで苦しんでいる状況の俺を見て、お前は俺を助けなかった。それどころか、苦しめと望み、俺を笑った。

なら俺も同じことをしようじゃないか。この半年間、夢をもう一度だけ見させてやっつろう。夢が醒めるどころか、その夢に裏切られる気持ちはどうだ？」

これが正しい未来、正しい過去、正しい結末。

蛍、俺は自分の人生が失敗したらメルティアの力がなくてもお前を必ず殺す気だった。俺の人生をこんな風にしたお前はいずれ必ず殺す。だがメルティアのおかげでお前を処分できて幸いだった。そうじゃなきゃ人生捨てて復讐しなきゃならないところだったからな。

蛍の動きが弱くなった。

「安心しろ。アルシェの面倒は見る。紫苑も嫌がらないだろう。俺は、お前がそうしたように、被害者面してやる。妻を殺された薄幸の青年としてな。

蛍……お前、あと何分生きていられるのかな。楽にはしない。お前が自然とガキを産んだように、俺に黙って自然と命を作ったように、自然とお前の命が終わるまで、見届けてやる。これで公平だろう？」

徐々に力が抜けていく蛍を押さえながら、俺はじっと蛍の顔を見ていた。

「今度は俺がお前を捨てる番だ。蛍、お前はもういない。別れは言わないぞ。お前も何も言わなかった。バカなやつだ。俺に逆らわずに大人しく言うことを聞いておけばよかったものを。そうすれば未来や過去で殺されることもなかったのに」

蛍は目を大きくしたり細めたりしている。

「訳分かんないよな。うん、俺もそうだった。あのときは何が何だか分からなかったよ。お前、俺が助けてくれる期待をしてるだろ。俺もそうしてた。期待してたよ。でもお前は

なしのつづて。俺が長々出した手紙に対して弁護士が代弁。しかも一行で突っぱねた。あの瞬間かな、明確な殺意を抱いたのは。お前ら、男のことなめすぎだ。

メルディアがいなくても同じことをしていたさ、いづれな。

期待は儂いな、蛍」

蛍が動かなくなって呼吸が停止し、死亡が確認されるまでに、約50分かかった。この50分の間、蛍は地獄の苦しみを味わった。これが報いだ。相殺されずに残った報いだ。何が報いか、何が罪かは俺が決める。そして蛍の死をもって、俺と蛍の報いは帳消しになった。

妻だった女の亡骸に毛布をかけると、ゆっくり立ち上がってベビーベッドに寄った。

息子が寝ている。できたらできたで可愛いものだな。

ゆっくりと息子を抱き上げた。俺の左手にはメルディアが着けられている。

「お母さんのところに帰ろうな」

起きない息子。大人しい子だ。

「ごめんな、本当のお母さん亡くしちゃって。その代わり、父さんがもっと若くてきれいで頭がよくて、それでいてきちんとお前を愛してくれる新しいお母さんを連れてきてやるからな」

メルディアが光る。俺は光とともに、一瞬にして遠く離れた池袋へ飛んだ。サンシャインの前の通りだ。時間は夜の8時。俺は辺りを見回すと、近くファミリーマートに入った。ここは少し変わった店舗だ。

息子を抱えながら店内をうろつき、ガムを1つ買うと、1万円で払ってレシートをもらった。そのまま店を出ると、近くの階段から地下道へ入っていった。誰もいないのを見計らうと、俺は再びメルディアに触れた。

2006/12/19

慣れた光。俺は息子が泣かないよう、右手で目を覆っていた。光が消えると、そこは紫苑の部屋だった。

「……！」目を丸くした紫苑が立っている。

ああ、久しぶりの紫苑の顔だ。半年も経ってしまった。この間、どんなに紫苑を抱きたかったことか。

「先生……？」

「ただいま、紫苑。久しぶりだね」

「……ど、どれくらい久しぶりなんですか？」

困惑した顔の表情の紫苑。そうか、紫苑の中では半年どころか数秒と経っていないんだ。

「うーん……」と俺が唸っていると、紫苑は不安そうな顔をした。

「どうしたの、紫苑。とても不安そうな顔だけど。俺、帰ってきてはダメだったのかな」

「そんなことないよ！」突然大声を出す紫苑。俺は少し面食らった。こちらは久々だから少し遠慮がちだが、向こうはついさっきまで死線を潜り抜けてきた相手のつもりなのだ。

「私は、あんまり時間が経っちゃって、先生が今日の私たちの思い出、シェルテス戦のこととか……その……プロポーズのこととか、忘れてないか、心配で……」

「はは、それはないよ。俺こそ、半年の間心配だったんだぜ。俺が去った数秒後に戻ることは分かっていたけれども」

「半年!？」驚く紫苑。アルシェが起きてしまった。ああーんと泣くアルシェ。紫苑は慌てて自分の口をふさぐ。

「ごめんなさい、私……あの……その赤ちゃんは……？」

「うーん、どこから説明したものか。紫苑なら、推理できてしまうのかもしれないけど」

「半年……」紫苑は素直に考え出した。手を顎に当て、ベッドに座る。

「つまり……蛍さんに子供を産ませ、その子供とともにこっちに戻ってきた、と」

「まあそうだね」

「蛍さんのところへ戻ったときに、別れなかったんですか？」

「別れたら親権取られちゃうからね。というかこないだみたいにある日突然逃げられたら法のせいで子供と引き裂かれてしまう。だったら無理に奪うしかないよ」

「子供のこと……愛していたんですか？」

「いや。俺がかつて話したように、元々蛍が産んだ子供は少しも愛していないよ。生まれたことさえ知らなかったからね。俺に父親の自覚はないよ。だが、この子は違う。俺は出生を知っていたからね。

俺はあの日、出て行こうとしていた蛍を引きとめ、口八丁でその場を収めた。不安定だった蛍を宥めつつ、俺は塾を辞めて翻訳の仕事に就いた。そのまま半年の間、この子が生まれるまで、俺はずっと蛍がそうしてきたように、自分を偽った」

「偽った……？よりを戻したというわけではないんですね？」

「俺がほしかったのはこの子だ。ほしかったというよりは、責任を取らなければと思ったんだ。俺は仕事で出産には立ち会えなかったが、通常の父親と同じように、子供の誕生をいち早く知った。戸籍なんかじゃなくてな。それでこの子は俺の子だと思っているんだ」

「そう……それでその……蛍さんとはどうなったの？子供ごと連れてメルディアで逃げたって、半年ブランクができるだけじゃない。光が丘は大騒ぎだったかもよ」

「ああ、違う意味でそうだったろうな」

首を傾げる紫苑。そして徐々に顔をこわばらせていく。

「あの……先生……」

「ん？」

「蛍さんで……」少し顔色が青ざめている紫苑「彼女、今、何を？」

「さあ。ただ、いずれにせよ、俺は約束どおり紫苑を選んだよ。しかし、子連れというのは迷惑だろう。だから紫苑が嫌だというなら、それは仕方ない。俺はこの子と暮らすよ」

「うん」首を振る紫苑「連れ子とかそんなの問題じゃないわ。静の子供なら私の子供でもあるもの。そう思えるの」

「そうか、よかった。安心したよ。ありがとうな、紫苑」

「それより気になってるのは……蛍さん……まさか、本当に？」

俺は無言で頷いた。蛍がどうしても親権を請求できない状況など、1つしかない。そのことを紫苑も分かっている。

「どうして……？そこまでしなければならなかったの？それに、静は平気なの？警察とか」

「大丈夫、メルディアでアリバイは作ってある。俺があいつを刺したのは——」

「刺した……」青ざめた顔で小さく囁く紫苑。

「——法のせいだ。法は女を優遇する。どうせ法廷に持っていけば蛍の勝ちだ。子供は取られる。じゃああいつには消えてもらうしかない。通常、そうすると捕まるのは男だから、誰もやらない。でも俺にはメルディアがあった。まあ、なかろうがいずれ同じことをしたかな」

「……それは想像できる」

「要するに、法のせいというのが一番だが、いずれにせよ蛍は俺をあざ笑った報いは受けるはずだったんだよ」

「うん……私は静が捕まらなければそれでいいよ。蛍さんのことはどうでもいいから」紫苑は話題を変えようとする「その子、性別は？」

「息子だ。そういえば話したことなかったね」

「あ、男の子だったんだ。半年ぶりに知りました……っていうのは変な言い方だけど。名前は？」

「アルシェ」

「へえ、アルカの名前にしたのね。役所にも届けたの？」

「ああ、忌々しい練馬区役所できちんと歴史を塗り替えてやったよ」

「ねえ、抱いていい？」

「ああ、紫苑が俺と結婚すればこの子は名実ともに紫苑の息子になるから、母親として抱いてやってくれよ」

すると紫苑は嬉しそうに微笑んで俺の息子を抱いた。アルシェは大人しく紫苑に抱かれた。女子高生の柔らかい体が心地よいのか、アルシェは目を醒まして紫苑にぴとっとへばりついた。紫苑は珍しく黄色い声をあげて可愛いと喜んでいた。頭の匂いを嗅ぐと、甘いと言っていた。よかった、拒絶されなかった。俺はほっとしながら2人を見ていた。

2009/6/27

「——リディアは？」

「えと、アルシェと同じで、小学生以下は無料みたいです」

財布から千円札を出すと、機械に通す。大人 2 枚の入場券を買って、園内に入る。

東京都立川市、昭和記念公園。土曜日。俺は紫苑の手を片手で引いて久々の入口をくぐった。もう片方の手には乳母車。

園内をまっすぐ歩く。左手はこもれびの池。この公園には入口が多いが、俺が一番初めに来たときにぐるっと道路を周った結果、たまたま砂川口から入ったことがあり、それ以降必ずここから入ることが習慣になっている。紫苑と行ったときも同じだったし、今回もそうだ。

秋になると赤いコスモスが咲く一画で右に折れる。少し小高い丘になっている。立川市が一望できる丘だ。芝生が敷かれ、大きな石が置かれている。あのときのままだ。

丘に登ったらなぜかここだけ突然曇ひとつない天気になった。

「あれ……？」

手をかざしながら空を見る。誰か魔法でも使ったかのようだ。

紫苑はビニールシートを広げると、鞆を重りに使った。鞆から弁当を出す。

「先生、お昼にしましょ」

「あのさ、空が……」

「そら？」

……まあ、いいか。

乳母車に近寄った。中には 2 人の赤ん坊がいた。最近ようやく人間らしい顔になってきて、可愛くなってきた。

「ほら、アルシェ、リディア。見てごらん、この景色。俺な、子供にこの景色を見せたいって思ってたんだ、ずっと……」

2 人は大人しく、安らいだ顔をしている。

「ようやく見せることができたよ」

じーっと丘の下を見る子供たち。俺は 2 人を両腕に抱えた。

「……生まれてきてくれてありがとう」

「ああ、その言葉、嬉しいなあ」と後ろから紫苑が言う。

「そう？」

「うん。言い換えれば、産んでくれてありがとうってことですよね？」

「もちろん」と座る。

「私もよ。産ませてくれてありがとう」

人目があるのにも関わらず俺は紫苑の唇にキスをした。

紫苑は「えへ……」と言って顔を赤くした。

俺が紫苑の元へ帰って 1 月もしないうちに、紫苑の妊娠が発覚した。あれは確か紫苑のセンター入試の日だった。紫苑はセンターを辞め、東大を諦めた。

その後、急遽家族会議になり、ちょうど居合わせた俺も参加した。そのとき、隠してい

たアルシェの話も出した。子供は虫に任せられないので取り上げたとお母さんたちには説明した。

紫苑はアルシェも育てるし、お腹の子供も育てると言った。お母さんたちはおろせとはいえないと言い、紫苑の気迫に折れた。

俺は12月の時点で既に塾も翻訳会社も辞めたことになっていたため、無職だった。だが、紫苑の妊娠を期に籍を入れることになり、それがきっかけで紫苑のお父さんにヘッドハントされた。紫苑のお父さんは外資のお偉いさんで、俺はお父さん直属の部下として働くことになった。

紫苑はというと、2人の子供を育てるのに大学など行けないと言い出し、受験そのものを投げってしまった。これに反対したのが意外にもお父さんだった。お父さんは紫苑が受験という戦いから逃げることに難色を示した。それに応えて紫苑は大学を受験した。そして当然のように合格し、そのまま入学手続きをせずに終えた。

紫苑のような才女が大学に行かずにどうするかと思ったが、紫苑は笑って「大学なんていつでも行けるわ」と返した。どうやら子供のことが優先されているようだった。

俺はお父さんの部下として下積みをしていたが、お父さんの計らいで定時少し過ぎにはいつも帰してもらっていた。おかげで紫苑やアルシェと毎日一緒に夕飯が食べられた。

紫苑の妊娠は順調で、虫と同じようにたやすく産んでしまった。産後の容態も順調で、何ら問題なかった。生まれてきたのは娘だった。セックスが激しかったので前回と同じく息子だろうと思っていた俺にはやや意外だった。俺たちはその子にリディアという名前を付けた。

紫苑はリディアに初乳を飲ませたが、アルシェにも飲ませたいとって飲ませていた。抗体をたくさん含む初乳は子供を強くするらしい。2人同時に授乳する紫苑を見て、何とも頼りがいがあると思ったものだ。ついでに、夜になると紫苑は俺にも同じものを飲ませてきたが、そういう虫じみた話はまた別の話。

リディアはアルシェに劣らず大人しい子で、ほとんど泣かない子だ。親思いといえそうだが、元気の足りない子でもある。だが、アルシェとは気が合うのか、こうして同じ乳母車の中にも、反目しあうことはない。アルシェも同様で、リディアを疎んじてはいないようだ。

しばらくすると、お父さんから電話があった。仕事の話だ。今日はせっかく休んだというのに。ケータイで話す俺を尻目に、紫苑は少し寂しそうな顔で佇んでいた。電話を切る。「お仕事なの、先生？」

紫苑はあいかわらず俺のことを先生と呼ぶ。いつになったら俺の生徒を辞めるのだろう。「うん、問題が起こっちゃったみたいで。ごめん」

「謝ることじゃないよ。先生が働いてくれてるおかげで、私とアルシェとリディアはご飯を食べていけるんだから。あーあ、私が先生の仕事、手伝ってあげられたらなあ」

「いいんだよ、紫苑はそのままで。そりゃ紫苑が仕事すれば即戦力だとは思うけど、今は子育てが一番の貢献だよ」

「ふふ、そうね」

「さて、行かないとな。紫苑は免許ないから、俺だけ電車ってわけにいかないな」

公園の外へ出た。外に停めてあるエブリーのドアを開く。

「まさかかつて話してたケッパコに乗るとはなあ。覚えてるか、ケッパコの話」

「まだ恋人時代でしたね。ファミリーカーでカッコ悪いとか言ってたよね、静」

「うん、でもしょうがないよな。実際便利だし。燃費もいいし、広く乗れるし。金もあまりかからないしな」

「お父さんがもうちょっとお給料くれれば静も良い車乗れるのになあ」

「そう言うなよ。お父さんはあるとき確かに俺に世の中の上に行く切符をくれたよ。だけど、俺は途中でくじけてしまった。虫を恨むとか、そういう強い反骨精神があれば別だったろうけど、俺は満たされて甘えていたからね。俺にはお父さんみたいな強い生き方はできなかった。でも、そこで見捨てないで楽な部署に回してくれたのはありがたかったよ。ふつうならクビだぜ。お父さんがいたからこそ、こうして定時過ぎに帰れる仕事に就けたんだ。収入はずいぶん減っちゃったけど、人並みだし、苦しくはないからなあ。それでも紫苑には迷惑をかけてるとは思うけど」

「何言ってるんですか、迷惑なんてないですよ。もし迷惑だとしたら、先生がワーカホリックになって家庭を顧みないことです。それは嫌。お金に困ってるわけでもなし、今の生活が幸せよ」

「そうか」

俺はエンジンをかけると、微笑んだ。

「あ、紫苑、バックするからちょっと見て」

「ん、珍しいですね、先生が車のことで私に頼むなんて」と言って左後ろを見る紫苑。しかし一向に発進しない俺を訝ると、「どうしたの？」と振り向く。その瞬間を狙って俺は紫苑の頭を抱き、その唇にキスをした。「んっ」と小さく声をあげて、紫苑の体が一瞬こわばり、やがて脱力した。

「だまし討ちのキス、どう？」

「……すてき」

「機嫌よくなった？」

「うん、なにもかも。あ、あのね、今から仕事に行くのはいいんだけど、早く帰ってきてほしいの。今夜ね、行きたいところがあるんです」

「いいよ、どこ？」

「先生の大学の池……」ぽつりとつぶやく紫苑。

「なんでまた」

「べっこの髪飾り……」

髪をかき分ける紫苑。長い黒髪が緑の滝となって流れ落ちる。

「買って……ほしいな。池で挿してほしいんです」

俺は複雑な笑みを浮かべた。久々に胸痛がする。

「その後、場所を変えましょ。私、朱塗りの橋の上であなたにこう聞くんだ」

「うん？」

「ほたる、みれた？……って」

2027/12/19

埼玉県南埼玉郡白岡町新白岡の一軒屋。

夜8時。39歳の水月紫苑は居間で1人腰掛けていた。

私はため息をつくとき、時計を見た。目下の食卓には鍋が一台。ネギや豆腐がぐつぐついつている。鍋の火を弱めようとしたとき、ちょうど玄関で物音がした。

「ただいまー」という声が折り重なって聞こえる。私は顔を上げるとスリッパをパタパタさせながら玄関へ向かった。

「おかえりなさいーい」

帰ってきたのは私の家族。夫の水月静、息子の水月アルシェ、そして娘の水月リディアだ。3人は靴を脱ぐと、洗面所へ行った。

「お鍋、煮えてるよー」

居間から声をかけると返事が聞こえてくる。私は鼻歌まじりにお皿を用意しだした。ここは私が生まれたお家。私はずっとここで育った。リディアが産まれたころ、一時的に静の家に厄介になったことがあったけど、お父さんとお母さんが新しい家を買って移り住んでからはこの家が不要になったとかで、結局私たちが戻って住んでいる。もちろん建ててからそれなりに経っていたのでリフォームはしたけれど。

「紫苑、手伝おうか？」

廊下から入ってきたリディアが袖をまくる。私は子供に自分たちの名前を呼ばせることにしている。アルバザードの手法を真似た生活だ。

「ありがとう、お皿並べて」

「はい」と素直な返事をするリディア。私が子供のころはここまで素直だったのだろうか。

「あ、鍋だ」少しゆっくりした声でアルシェはつぶやくと、ちょこんと椅子に座る。そのまま無言でタレの瓶やお箸を皆の場所に回す。

「今日は皆いるからね。それに寒いし。ねえアルシェ、お墓参りはどうだった？」

「ん……」さっそくレンゲで掬うアルシェ「いつもと同じだったよ」

「そう……」

「お、鍋か」静が入ってくる。てゆうか、鍋って言ったのに聞いてたのはリディアだけな

のね……。

「でも、これで20年ってことになるのか……」ポツリとつぶやくアルシェ「僕が生まれてから……つまり、蛍さんが死んじゃってから」

「そうね……」

私たちはアルシェの小さいころから、産みの親の話を包み隠さずしてきた。アルシェが日本語を理解するようになるのとどちらが早いという時期から既に。物心付く前だったからか、アルシェはその事実をわりと平然と受け入れていた。産みの親じゃない？だから何？という感じで。蛍さんについては産んだ人という意識しかないようで、私に懐いてくれた。私の方もアルシェを連れ子として差別したことはない。

「でも、どうして12月19日に決まってお墓参りに行くの？アルシェが生まれてすぐだったんでしょ。6、7月に亡くなってるのよね」

静を見るリディア。極めて美しい私の一人娘。私によく似た顔をしているが、私より少し小柄だ。体も小さい。少女のころの私を小さくしたような子だ。親が言うのもなんだが、リディアは可愛い。小さいころから芸能プロダクションの勧誘をよく受けてきた。こないだ20歳になったばかりだが、いまだに街を歩くたびに勧誘されるという。

かといってリディアは私の娘にふさわしく人付き合いの苦手な子で、そういった表舞台に出ることを拒んだ。少女時代はあまりに周りの人間に珍しがられるので、少し鬱になっていたようだったが、それを救ったのはアルシェだった。

アルシェもまた静に似て美しい青年に育ったが、彼も静に似て友達の少ない子だった。体はあまり大きくなく、気の優しい良い子に育った。静は息子にはもっと強くなってほしかったようだけど。

友達がいないせいで余計に2人の兄妹はいつも一緒にいたし、互いに唯一心を許せる親友にもなった。もしかして、アルシェがいなかったらリディアはもっと内向的になって自閉気味になってしまっていたかもしれない。まあそれはアルシェにもいえることだけだ。

とにかく2人は血のつながった兄弟以上に仲がよく、いつも一緒にいた。中学以降は街を歩くたびにカップルに勘違いされるようになったが、半分迷惑で半分楽だと2人は言っていた。美形の彼らにとって無駄に言い寄られないのは便利だったそうだ。

とはいえ、彼らも思春期のころはそれなりに色気づいたものだった。彼氏がほしいとか彼女がほしいとか、そういうまともな感情は備わっていたようだ。だけど、どちらかというとなら2人とも漫画や小説の中の空想にふける方が好きだったようで、実際の恋愛に発展することはなかったようだ。

リディアに至っては「理想は血のつながってない静かアルシェみたいな人」と公言しているだけに、難しそうだ。彼らみたいな男はまずいない。娘が嫁に行くのはまだまだ先のように。まったく、私がこの子くらいの年には既にこの子を産んで育てていたというのに、彼氏の1人も連れてこないだなんて——と思うときもある。

一方、静はリディアにずっといてほしいようだ。過保護なのか甘えさせているのか、静

はリディアにとっても甘い。アルシェにも甘いけど。実際彼氏なんか連れてきたら大変な騒ぎになりそう。リディアはリディアでそんな静にべったりだし。ふつうはそこで父親をじゃまがるものなんだろうけどなあ。

静はいつもリディア相手にでれでれしてるけど、いつだって私を一番に考えてくれてる。仕事はできるだけ早く切り上げて帰ってきてくれるし、浮気もしない。ギャンブルもしないし、お酒もタバコもやらないし、暴力も振るわない。家事も手伝ってくれるし、子供の相手も好んでしてくれる。たまに怒ると怖いけど、それは地震雷神親父の範囲内でだ。

もう40をとっくにすぎているのに、きつくない仕事と、私の滋養と愛情たっぷりの料理のおかげで、静は病気もなく健康だ。元々精力の強い静は、夜の生活でも私を満たしてくれる。殺された蛍さんが嵌ったという気持ちが私には分かる。結婚してから20年も経つのに、週に3、4回は抱いてもらっている。朝となく夜となく。休日は昼ともなく。私としては非常に満足だ。抱かれるたび、きれいになる気がする。癒される。愛されてるって実感できる。もっと静のためにきれいになろうと思う。おかげで私は来年40だというのに、まだ20台後半に見られることがある。実際、リディアのお姉さんですかと言われることがある。

私は結局大学には行かずに子育てを続けた。2人とも大人しい良い子で、まったく手を焼かなかった。2人が10歳になってから、私はパートを始めた。お金は決して余っているほどではなかったし、子供の学資でお金がいるから。それに、私は仕事をしたこともなく、あまりに箱入り娘だったから。思えばこれが最初の仕事経験だ。そのままずっと同じところで働いている。正社員になってバリバリ働くというのも考えたが、家族との時間を失うのが嫌だった。

子供たちは公立に進み、大学は私立に行った。そして仲良く同じ大学——静の大学——に進学した。

さて、その静だが、アルシェができてまず人が丸くなった。それに加えてリディアができて、もっと丸くなった。プライドが高く被害妄想が強く精神の不安定だった弱い人だったのを、子供という存在が変え、さらに私が叩き直した。おかげで今は穏やかなご主人様になってくれている。ただ、元々気性が荒いのはしょうがないので、無駄に怒らせないように気をつけてはいる。それは静みたいな人と付き合う上での優先すべきマナーなんだということを私は自覚した。

静もそんな私を好いてくれて、この年になっても変わらず愛してくれる。飽きない性格というのは本当だったようだ。まあ、それでも女好きの上に美形な静のことだから、不安が尽きないこともあった。会社の女には常に注意していたし、レインにも注意していた。

なんでレイン？実は彼女は静と浮気をしかけたことがあるのだ。私によって阻止されたけど。

レインは1年に1回、地球に来ている。私もアトラスに行っている。子供たちもそうで、「レインお姉ちゃん」と呼んで慕っている。

レインは子供たちをアルティス教化したいようで、教材やらを作ってはアルカを教えてきた。私が協力したかいもあって、子供たちはアルカのネイティブとはいかないまでも、17歳のころの私より遥かに上手なアルカ話者になった。

若いころのレインは私のお父さんのことが好きだったようで、何度もアプローチをかけては玉砕したらしい。

それであるとき、傷心のレインは、幸せな家庭を築く私を羨んで、静に泣きついたことがある。静を誘惑して私から静を奪おうという企みだった。親友に裏切られるとは思わなかったけど、そこまでしようとしたレインはかなり追い詰められていたのだろう。

静を誘惑するようなレインの口調。静はというと、慰めるかのような口調でいたが、頭の中では「美処女」のレインを後腐れなく抱くことを計算しているようで、ドアの隙間からじっと見ていた私は、思わずため息をついた。

静の帰りが早くて一緒にいる時間が長かったからか、そのころの私は静のしょうもない思考回路を察することができた。あの顔は据え膳食う気だなと直感した。その直感がなければもしかしたら彼らの浮気を黙って見過ごしてしまったかもしれない。でも静の下心が見えた私は、錯乱した親友を助けるためにも、その場でぼそっとつぶやいた。

「先生、そこで据え膳に箸つけたら、後で夕飯に毒盛りますからね。一緒に死にましよう、私とアルシェとリディアも連れて。レインを抱くことにそこまでの価値がある？」

そうつぶやいたら、静とレインは飛び上がるかというくらい驚き、真っ青な顔で脱ぎかけた服の上にシーツを被せ、衣服を正した。私はそのままにっこりと微笑むと、無言でその場を去った。2人にとってはどんなに恐ろしい光景だったろう。すっかり浮気心などなくして2人は離れた。

その後、私はレインのところへ行くと、最初で最後の大喧嘩をふっかけた。わざとレインを傷つけて挑発して怒らせ、私への嫉妬の言葉を吐き出させた。言われた私はむしろレインの言葉を受け入れ、聞いてあげた。理解を示してやるとレインは泣き出し、謝ってきた。私はこれからも親友でいたいので逃げないでと告げた。レインはその次の年、子供2人にたくさんのプレゼントを持ってやってきた。

それからレインとの関係は続き、今に至る。彼女は私のお父さんを思ったまま未婚を通している。もはや結婚は諦めているようだ。何日かに1度愛のあるセックスをしてもらっている私は後ろめたい気持ちがあるけど、ほかの男の人を好きになれないというのはレインの問題だから、私が変わえられることじゃない。

「ね、紫苑。聞ってる？」

アルシェの声に私ははっとする。

「あ、ごめんごめん」

「どうして今日なの、墓参り」

「うーん」

口ごもる私。代わりに静が口を開く。

「蛍が死ぬと分かったのが今日だったからだよ」

「……病気じゃなかったと思うけど？ 僕、新聞の切り抜きで見たよ」

「そうか、不思議だな。でも俺は嘘ついてないぞ」

「……ふうん」と首を傾げる。

「静、おなべ、よそってあげようか？」手を伸ばして父の皿を取るリディア。静は「うん」と言って差し出す。まるで世話女房だ。この子は小さいころからずっとこう。私に対抗してるのかしら。

「ああ、私、お箸より重いもの持てないの」と言いつつ静を見ると、静は苦笑して私のお皿を取ってくれた。私が「ふふ」と微笑むと、リディアは「紫苑、嬉しそう」と言って微笑んだ。何て素直な子なんだろう。私と静から生まれたとは思えない。

「はい、リディア」

いつの間にか自分とリディアのお皿によそっていたアルシェ。この子は何でもそつなくこなすんだよなあ。

ぐつぐつ。

おなべ。

冬はいいね。

「あ、ストーブ切れそう」とリディア。

「入れてこようか」とアルシェが立つ。その手をリディアが引っ張る。

「いいよ、座って食べようよ。消化に悪いから」

「リディア、寒くないの？」

「大丈夫、この家、あったかいから。ちっちゃくて好きなの。すぐ暖まるでしょ？」

「小さくて好きなのか」と意外そうな静「もっと大きい家がよかったとか言われるかと思ってた」

「4人にはちょうどいいの。寄り添って暮らすのが幸せだと思う。ね、紫苑」

私は「そうね」と頷いた。

「というわけで、私は静にまわり付くの」笑いながら椅子を寄せるリディア。

私とアルシェは苦笑しながら彼女を見ていた。静は「お前はいつまでも子供だねえ」と呆れつつ、頭をぼんぼんと撫でた。リディアは「えへ」と、まるで私の少女時代のように笑った。

からっぽおなべが、ぐつぐつあふれそう。

火を止めたけど、暖かい。暖かいのは、きっとこの新白岡の小さな家だから。

そんな冬の日を、私たちは相変わらず過ごしている。

そんな、暖かい夜です。